

小説・治水の偉人 —大梶七兵衛

寺井 敏夫著

義民の遺業克明に描く



本書は、出雲の高瀬川開削など治水・開拓事業に尽くした大梶七兵衛の、親子孫三代にわたる苦闘を描いた伝記小説である。松江藩とのあつれきから親子二代が悲運に終わり、三代目にしてようやく念願を達成、名誉を回復するという壮大な物語である。

通読して、出雲平野の開拓にかける七兵衛の志の高さと、わが身の不幸を顧みぬ大梶家三代の献身的な働きぶりを克明に描いた、スケールの大きさに圧倒される。

特に、作品が説得力を持っているのは、作者が「義民の思想」で主人公の七兵衛をとらえているからである。周知のように、義民とは、封建時代に社会の底辺にいる農民や町人のために、わが身と身代をなげうって尽くした人のことである。大梶家三代の治水事業は、まさしく貧しさにあえぐ出雲地方の農民を救うための義民による義挙であった。

主人公が活躍した一六〇〇年代は、戦国時代が終わわり、各藩は農本主義のもとで競って新田開発に伴う治水事業を推進した時代であった。松江藩も財政を確立するため、出雲平野の開拓は至上命題であった。

他方、七兵衛は農民を貧困から救済したいとの一念で、治水事業に精励した。これらの治水事業で、出雲平野の米作は一挙に二万石以上の増収になり、斐伊川から運河を通じて奥出雲―日本海への物流が可能になったのだから、いかに大事業であったか分かる。

財政の確立を目的とする松江藩と、貧しい農民を救済しようと立ち上がった七兵衛との対立は不可避であった。大梶親子に地所・身分の剥奪（はくたつ）、処刑などの数々の理不尽な災難が降りかかる。

作品は、計算された構成と平明達意の文章、老練な語り口で出色の出来栄になった。

作者は元農協職員で、現在、島根県文学連盟理事として活躍。これまで『清原太兵衛』『隠岐の嵐』を出版して注目されている。ぜひ一読を勧めたい。

（池野誠・島根県文学連盟会長）
（HNS人間・自然・科学研究所・一四〇〇円）